

地域性と文学

— 鈴木三重吉「千鳥」「山彦」、「小鳥の巢」を中心に —

榎林 混 二

はじめに

「地域性」ということについて、固有の名辞の有無にかかわるなら、鈴木三重吉の文学における地域性は一種の逆転がありそうである。周知のように、鈴木三重吉を世に広めたのは「千鳥」(明39・3)、「山彦」(明40・1)の二作による。抒情のヴェールに包まれて、三重吉はそこに中国地方の美しい海と山とを描き出した。穏やかな風光と人情、のどやかな時間と季節の移り変わり、夏目漱石をして激賞せしめたりリズムの発露、そこには、まさに広島風の風光の美しさや懐かしさがある。だが、僅か三年のちの「小鳥の巢」(明43・3、10)にはそういったリズムはかげを潜めている。そこには、生活の暗い現実、愛憎の利己的な表出、寂しさ、孤独、生と性との確執の追尋があった。代わりに、そこには、中国地方ののどやかな風光の描出に欠けるところがある。しかし、奇妙なことに、この作には、広島人なら、明らかに察知される広島地名や固有の名辞が多々記されているのである。ここに一つの変化がある。これは何か。

この変化とその背景に、夏目漱石の有名な反転、「倫敦塔」(明38・1)他に始まる浪漫的な作品群や「草枕」(明39・9)などの

非人情の世界との別れがあることは、すでに多くの指摘があるところである。⁽¹⁾ 漱石自身、自らの退嬰をくい止めようとする意識があり、その直流たる三重吉はまさに、その反転の波を全身に受けていた。

本稿は、これらの先行の論の一種のなぞりの形になるが、本特集の「地域性」にかわりつつ、それらの内実と意味について少し考察してみたか思っている。三重吉に何があつたか、それがどう反転したのか、そのとき、何が「地域性」とかわつたのか、かわらなかつたのか。三重吉は、それらの経由を、「文鳥」(明42・11)に記している。それらの内実の検地ということになるか。その一節を少し長くなるが引く。

それから自分は、途中で体が悪くなつたので、東京を去つて、或西の国の小さい島へ這入つて一年ばかりゐた。日夜壁の後に大きな浪がくだけた。自分は夜々、翌る日食ふ米を杵で搗いた。

(中略)

自分はこの時「ー」といふ小さい作を書いた。さうして再び東京へ出て「ー」を書いた。小さな拙ない自分は、拙ない小さな作を書く。自分の書いたものは自分には悲しかった。書いては直し、書いては直し、いろいろな小さい作を書いた。

自分は悲しい時には、先生のところへ行つた。文鳥の忘れられぬ自分は、たうと或日先生に文鳥を買はせた。さうして自分が掛けては世話をし、自分の指図に従つて歌ふやうに教へてゐたが、この文鳥はいくらもたゝぬうちに、或日先生の留守の時に、終日餌も水も貰へなくて死んでしまつた。(中略)

自分は先生の文鳥が死んでから、今度は自分で買つて、それを持つて薄暗い筈町から薄暗い千駄木へ移つた。さうしてそれを机の側に置いて、やはり、小さい「ローロー」を書いた。(中略) さうしてゐる内に国許から父が危篤だといふ知らせが来た。その時自分は「ローロー」を書きかけてゐた。急いで国へ帰つて見ると、父はもう亡くなつてゐた。桑島に包まれた小暗い家には、ただ祖母と自分だけが残つた。

その後自分は下総へ来た。祖母は、暫く千代の母のところに預けてゐただけで、この間、幾日もかゝつてはるばるつれて来て一しよに住つてゐる。

この「ローロー」や「ローロー」などの内実の考察ということにならうか。

上

「千鳥」は、三重吉が精神的に少し疲れ大学を休学、瀬戸内海の能美島に一時、生を養つた、そこに材を取つた作品である。暖かく迎へられた主人公は、そこで「藤さん」という佳人に会う。しかし、瞬時にして別れていく。その間の淡い思いと哀しみを見事に描き出し、あ

わせて、瀬戸内の風光、「地域性」を鮮麗に現している。それらを少し引く。まずは、有名なその冒頭部について。

千鳥の話は馬喰の娘のお長で始まる。小春の日の夕方、蒼ざめたお長は軒下へ蓆を敷いてしよんぼりと坐つてゐる。干し列べた平茎には、最早糸筋ほどの日影もささぬ。洋服で丘を上つて来たのは自分である。お長は例の泣き出しさうな目もとで自分を仰ぐ。親指と小指と、そして襷がけの真似は初やがごと。その三人ともみんな留守だと手を振る。顎で奥を指して手枕をするのは何のことが解らない。藁でたばねた髪まげの解ほれは、搔き上げて直ぐまた額に垂れ下る。

「馬喰の娘」の話が始まる。島の家では、「年若い一人の婦人」に、「懐しさうに」迎えられる。そこでの景色は、優しく美しい。

女の人も自分の側へ寄つて等しく外を見る。山島のおちらこちらを馬が下りる。馬は犬よりも小さい。首を出して見ると、庭の松の木のはづれから、海が黒く湛へてゐる。影の如き漁船が後先になつて続々帰る。近い干潟の灰白い砂の上に、黒豆を霽こぼしたやうなのは、鳥の群が下りてゐるのであらうか。女の人の教へる方を見れば、青松葉をしたゝか背負つた頬冠こゝろの男が、とことこ畦道を通る。(中略)それが蜜柑畑の向うへ這入つてしまふと、しばらく近くには行くものゝ影が絶える。谷間谷間の黒みから、だんだんとこちらへ迫つて来る黄昏の色を、急がしい機の音が招き寄せる。

「山島」、「漁船」、「干潟」、「蜜柑畑」、「機の音」、それらはすべて淡わく懐かしい。「フヂサンガマタナク」の「紙切れ」があ

り、何かの不安を暗示する。心一つで、島の風景はいかにも美しく懐かしい。蟹を食べるかとお手伝いの初やの「がんす」言葉もその風景に色を添える。

「え、はあ買うたるのよ。午に煮ようかと思ふんでがんさ。はあ直にお午ぢやけに。——食べなんした事ががんすのかいの？」

「食べるけど、あれは厄介なばかりで仕方がないや。」

「おいしいものですけれどね。」

「それは甘うがんすえの。それにこの頃は月が無い頃ぢやけに尚更甘いんでがんすわいの。いいえ、ほんとでがんすて。月夜にはの、あれが自分の影に怖れてびくびくするけに瘦せるんでがんすといの。」

今少し、島の風景を引く。

自分はお長と並んで、島の隅の蓆の上で煙草を吹かす。双た親は鎌を休める度毎には自分の方を向いて話をする。お長も時々袖を引いて手真似で話す。沖の鳥貝を掻く船を指して、どの船も帆を三つづつ横向きにかけてゐる。両端から二本の碇綱を延ばしてゐるゆゑ、帆に風を孕んでも船は動かない。帆が張つてゐるから碇綱は弛まぬ。鳥貝は日に干して俵に詰めるのだなど、言ふ。浪が島の下の崖に碎ける。日向がもくもくと頭の髪に浸みる。

しかし、会つて二日目、散歩に出た間に、藤さんは「伯父さん」に国へつれ帰される。「自分」は、藤さんの乗つた船を見送る。

白帆が見える。池の如く澄み切つた黄昏の海に、白帆が一つ、動くともなく浮いてゐる。藤さんの船に違ひない。帆のない船は

みんな漁船である。藤さんが何か考え込んで斜すかひに坐つてゐるところが想はれる。伴れに来た人は何にも言はないで、鼻の痘痕を小指の爪でせゝくつて坐つてゐるやうな気がする。(中略) 船から隣村の岸までは、目で見てもこゝからこの前の岸までよりか遙に遠いけれど、まだ一里と乗り出してはゐない。自分が畑に永くゐさへしなかつたら、少くとも藤さんが出かけるところへなりと帰つて来たであらうに。それともなぜはじめから出て行くのを止さなかつたらう。

そして、そのあと、「緋の紋羽二重」の「片袖」を「机の抽斗」の中に見出す。

けれども、ふと机の抽斗を開けて見ると、中から思わぬ物が出て来た。緋の紋羽二重に絳もみ絹裏の付いた、一尺八寸の襦袢の片袖が、八つに畳んで抽斗の奥に突つ込んであつた。もとより始めは奇怪な事だと合点が行かなかつた。別に証拠と言つては無いのだが、それが、藤さんが窃かに自分に残した形見であるとは容易に信じられる訳もない。併し抽斗は今朝初やに掃除をさせて、行李から出した物を自分で納めたのである。袖はそれより後に誰かが入れたものだ。そしてこの袖は藤さんのに相違はない。

わずか二日の、淡い美しい出会いと別れだが、それ以上に入ろうとしない、ただ、「自分」の中にしまひ込む。「自分」は「一番しまひにかう考へた。」と次のように続ける。

話は只この二日で終らなければ面白くない。跡へ尾を曳いてはもう拙らなと考へた。或西の国の小島の宿りにて、名を藤さんといふ若い女に会つた。女は水よりも淡き二日の語らひに、片袖

を形見に残して知らぬ間にみなくなつて了つた。去つてどうしたのか分らぬ。それで沢山である。何事も二日に現れた以外に聞かぬ方がいゝ。もしや余計な事を聞いたりして、千鳥の話の中の彼女に少しでも傷が付いては惜しい訳である。

藤さんに何があつたのか、「自分」はその中味も、そのあとを追わず、以後の話題にもしない。すべてを物語の中に封じ込める。

袖を畳むとかう思ふ。この袂の中に、十七八の藤さんと二十ばかりの自分とが、いつまでも老いずに封じてあるのだと思ふ。藤さんは現在どこでどうしてゐても構わぬ。自分の藤さんは袂の中の藤さんである。藤さんはいつでもありありとこの中に見ることが出来る。

千鳥千鳥とよくいふのは、その紋羽二重の袖の紋柄である。

現実の正視を避け、自己の想いに封じ込め、その想いと余情に生きる。「千鳥」の世界である。

次作の「山彦」も同種の景色を持つ。山中の豪家に嫁いだ姉を訪ねて、幾日か過ぎす。「奥の一と間」の天井裏に「一たばの封書」を見出す。「古き代」の恋の封書である。この家では、代々二十七歳で嫁が死んでいる。少し病気がちの姉を心配する。そんなストーリーであるが、広島山地の、いかにも美しく懐かしい風景が全般に流れている。ここでも冒頭の有名な一節を引く。

城下見に行こ十三里、炭積んでゆこ十三里、と小唄に謡ふといふ十三里を、城下の泊りからとほとほと、三里は雨に濡れて来た。

これじやいの、こつちへ行くと門ががんすけ、と言つて、伴の女は、大きな立木の覗いた、古ぼけた練塀の角へ来て止る。この

榎が三百年、淡名屋が出来てから三百年と言ひながら、馬の合羽をめぐつて風呂敷包みを出してくれる。榎の傘がぱたりぱたりと洋傘に落ちる。向ふ角の小店の、赤い天狗の面を書いた障子の灯が、泥濘へぼんやり写つてゐる。この簞はこちらから返させるからと言へば、何の、わしにくれなんせ、序ががんすいの、と言つて馬へ付ける。

姉の嫁ぎ先までの、小唄の一節で描き出される道行き、「がんす」言葉、暖かい人情。一気にのどやかな中国山地へ招き入れられる。

欄干の下は水である。灰白き花の萍うきくさに、絹糸のやうな小雨がかゝる。水の向うには、杉の大木が何十本と立ち重つて、男郎花女郎花などが、間にちらほら咲いてゐる。こゝは百何年とやら昔に、国の殿さまが来られた時に建てたものだ、この上へ上れば庭がすっかり見えると言つて、姉は襖に両手をかけて、寂びた銀箔の色を左右に開く。中は小暗い四段の段々になつて、黒塗の障子が高く嵌つてゐる。上へあがれば、古い絵草紙の中へ這入つたやうな心持がする。

「古い絵草紙の中」に這入つたやうな感じの世界、天井裏で見つけた「古い手紙」は次のようである。「再び奥の間」である。

自分は古き代の恋の封を切る。しめじめと小雨のごとき筆の跡である。

けふの牛いちへお里からまゐりし人のそうるふよし、うけたまはり、またまたかひなきうらみをこつとつてまいらせそうらふ。

と、走りがきに纏れた仮名が、考へ考へて五行ばかり読める。途

中で先まで開いて見る。

「風呂」に案内される。入っていると、宴を催しているのか、人々の唄う声が聞こえてくる。

風呂へ浸つてみると、乙吉や、与吉やと、お櫃が声を絞つて促してゐる。一座がしんとなつたかと思ふと、二人の若者が節を揃へて小唄を謡ひ出した。黄いろい声と胴満声とが甘く一つに調和してゐる。駆け出して行くやうな、景気のいゝ唄である。黄いろい方が乙吉かと聞いたたら、お京は、はい、と言ひつゝ着物を片寄せる。落舟の唄ださうである。何とかよをゝゝいと、しまひを細く長く投げる。

その夜、姉と語りあう。

二十五間の縁に月夜を踏んで、奥の間へ這入つて行く。上の間に点した朱塗の雪洞の灯あかりが、黒びかりの段々にゆらゆらと流れ落ちてゐる。雪洞の向うに、袖の振に紅友禪の覗いた姉の後姿が、待ちわびたやうに火鉢の灰を掻いてゐる。

月光の中、懐かしい姉との、夢のような美しい世界が描き出されてゐる。今少し引く。

障子の外は、深い水の底の国のやうである。一面に碧くさした月影を掻き別ければ、手に白き泡と割れ返るであらう。池の面が絹蒲団の上を行くやうに歩かれさうで、木間に潜り入れれば、枝は藻草の如くにゆらゆらと靡きさうだ。小黒く向うを限つた松山は、撥はたれば薄紙の如くにべりべりと破れてしまつて、二三十里のただ碧白き国が、この高殿の領に入らうと思はれる。山のはづれから庭の色は白みがゝつて、上へ延びると再び碧く空とな

る。影のごとき阿妻屋の屋根の上に、星が一つ見えてゐる。静かな月夜である。もの言へば、わが声が水の上を渡つてゆく。

「山彦」は、このような、「物語」や夢のような世界の中に終始する。中国山地の美しい流れるような叙景と抒情の世界である。

「千鳥」の瀬戸内、「山彦」の中国山地、三重吉の初期は、かくも鮮やかに広島風の風光や懐かしい人情を伝えている。美しい叙景と抒情、広島という「地域性」の一角を鮮やかに描き出している。

ところで、これらの世界、とりわけ、「千鳥」に比する、一つの規矩となるものがある。

美文集としてこの時代のベストセラーの一つ、大町桂月の『美文韻文 黄菊白菊』（明31・11 博文館）に収載されている「かた袖」という小品である。この作品の構図は、きわめて「千鳥」に似かよう。内容は、伊藤左千夫の「野菊の墓」（明39・1）とも通じ合うところがある。主人公の福井綾太郎の隣りの家に、木村兵蔵とお亀の兄妹がいた。兵蔵は嫁を迎え、お亀は商家に嫁ぐ。両親は死ぬ。お亀は夫の放蕩にあい、別れて娘の藤子と帰ってくるが、兄夫婦は冷たく、藤子と二人で別居する。綾太郎と藤子はふとしたことで知りあう。綾太郎の母は、この貧しい親子に同情、「学校にゆく資」もなきを知り、綾太郎の復習の時に、読み書きを教えさせたりする。綾太郎の中に、いつか淡い思いが生ずる。綾太郎が中学生の時、お亀は病死、兵蔵夫婦の冷たさに、母は同情して「仲働」として家に入れる。綾太郎は、中学を卒業、東京に進学するも、休暇の度に必ず家に帰り、藤子と親しむ。母は、女学校に進んでいる身内の玉子を綾太郎に配そうと考え、綾太郎の思いを心配、東京に遊学中に、藤子に暇を出す。兄

夫婦は冷たく、藤子は「国府の宿屋」に女中に出される。綾太郎は会に行き思いを伝えるが、藤子は「せめて万分一の御恩返しには私が御家を遠ざかるより外には道はござりませぬ、どうぞ玉子さまと行末久しく」と言う。遊学中の綾太郎はしのである程度か国府に行くが、どうすることもできない。その後、藤子については「雲州楼」という「龍神」（遊廓）へ移される。綾太郎は驚き、「前後の分別」もなく、「龍神」にかけつける。藤子は身を恥じ、「紅の片袖」を残して消えていく。

思うに、この「かた袖」という作は、当代の幾つかの作品に通いあうところがある。

「驟雨」の中、「野中の路」で藤子の傘に入る、二人の出会い。綾太郎は、その時、お亀、藤子の貧しさを知る。綾太郎は熱病で苦しむお亀の看病の資に金銭を与える。このシーンは森鴎外の「舞姫」（明23・1）の、太田豊太郎とエリスとの出会いを思わせる。

聞けばきくほど、あはれにも悲しく、われは子供心にも気の毒に思ひて、小遣にとて、わが持ちし銀貨銅貨取り交せて、袂にあるだけさらけ出し、藤子の家の前へ来りし時、これは、少しばかりなれど、今の御礼にとて強ひて其袂に押し入れて、雨の小止みせしを幸に、一礼そこそこ走りかへりてありし（「かた袖」）

「舞姫」は、クロステル巷の寺門の扉によりかかりて泣く少女を助ける。「我が隠しには二三『マルク』の銀貨あれど、それにて足るべくもあらねば、余は時計をはづして机の上に置きぬ。」とある。ともに美しい少女の苦しみを助けようとする。

また、東京遊学の前日、藤子との別れの時をすこす状景は、徳富蘆

花の「思出の記」（明33・33〜34・3）の、菊池慎太郎とお敏との対峙を思いださせる。

今ははや心の底わざわざ口に出す必用もなしといさみたつまゝに、唯、藤とばかりにて思ひにもゆるわが手をさしのべて、闇に白き藤子の織手を握れば、答はなく、ただはらはらと我が手の甲に落ちて声ある情の涙熱く、胸の奥にしみわたりぬ。我がおもひは之に知れと顫へる手にかたく締めて、藤そんなら暫くあはないよ、どうぞ御身体を大切に、お前も無事でと云ふ（「かた袖」）
不図忍び音の戯すずりなき 鞆が耳に入つたので、驚いて見れば、敏君は突俯して居る。

「あッ、お敏さん、如何しました？」

敏君は顔をあげた。涙が真珠の如く頬を伝ふて居る。何か云はうとして唇を開いたが、言ことばは聞へない。敏君はまた俯いてしまった。（中略）僕は夢中になつて背を撫でた。

突然僕の手は燃ふるが如き手に繋ひしと握られた。熱い雫が手に滴る。（「思出の記」）

そして、幼なじみの藤子と綾太郎の別れは、「野菊の墓」の母のしうちと重なる。こういつた中、しかし、いかにも相似るのは、先の「紅の片袖」を残して消える「藤子」と「千鳥」の同じく「片袖」を残して去る「藤さん」との類同である。「かた袖」の末尾を引く。

藤が魂は、とうに死んで居りますれば、世になきものと、お諦らめあそばせ、御声を聞くも涙の種、此の上の御情けには、どうぞ御顔を見せて下さりまするな、片時なりとも、このやうな処に居られては御身のけがれさあさあ早くお帰りあそばせ、若様御機

嫌よう、此で一生御目にかゝりませぬとて起ち上る。そなたの胸は聞いたが、わが胸も聞いてくれよ、まあまあ待つてと取りすがれば、伺はなくても、よく分かつて居りまする、御免あそばせと、一声言ひすつると共に姿は消えて、紅の片袖空しく我が手に残りぬ。

作品「かた袖」の舞台は、「遠く仰げば金剛葛城の二山天外へ積翠を横へ、一条の大和川平野の中に銀蛇を走らすなどなれにし故郷の山川の景色」とある。だが、ほぼ全般にわたってそれ以外の故郷を現す風光は乏しい。別にこの地でなくても、綾太郎、藤子の物語は成立する。対して、「千鳥」は、瀬戸内のおだやかで懐かしい風光がなくては成立しがたい。その風光に「藤さん」は包まれて限りなく美しく哀しい。

しかし、前記のように、漱石の有名な書簡等により、三重吉のこの世界は消えていく。それは漱石自身の問題でもあった。

普通に云ふ小説、即ち人生の真相を味はせるものも結構ではあるが、同時にまた、人生の苦を忘れて、慰謝するといふ意味の小説も存在してゐると思ふ。私の『草枕』は、むしろ後者に属すべきものである。（「余が草枕」明39・11）

漱石は、同論の中、「美しい感じ」が「読者の頭」に残りさえすればいいとも言う。しかし、また殆ど同じ頃、それへの反意も述べている。「只きれいにうつくしく暮らす即ち詩人的にくらすといふ事は生活の意義の何分一か知らぬが矢張り極めて僅少な部分かと思ふ。で草枕の様な主人公ではいけない。あれもいゝが矢張り今の世界に生存して自分のよい所を通さうとするにはどうしてもイブセン流に出なくて

はいけない。」「僕は一面に於て俳諧的文学に出入すると同時に一面に於て死ぬか生きるか、命のやりとりをする様な維新の志士の如き烈しい精神で文学をやつて見たい。それでないと何だか難をすてゝ易につき劇を厭ふて閑に走る所謂腰拔文学者の様な気がしてならん（中略）三重吉先生破戒以上の作ヲドンドン出シ玉へ」（明39・10・26 三重吉宛書簡）と記す。有名な一節である。

その意味で、島崎藤村の「破戒」を称揚する。三重吉へのこの書簡は、三重吉にとつても大きな反転となる。これらは、前記のようにすでに多くの指摘があるところである。

下

「山彦」の後、文鳥を飼い、綾さんとの淡い恋を書いた「鳥」（明40・4）、嫁ぎさきからやつてきて世話をするおみつさんにかわいがられる丁さんの物語「おみつさん」（明40・5）、若くして死んだ母、世話になつた伯母の家などでの哀しい思い出を記した「鳥物語」（明41・7）、「家船」で生活する若者と娘との恋の話「黒髪」（明42・1）など、淡い美しい作品を書いていくが、次第に、それらから別れ、自然主義的な作品の試みをしていく。「小猫」（明43・1）は、「父なし子」をつれて村に帰ってきたお岸は、貧しい生活の中、また、男をつくり、子を孕み、嫂のお幸に教えられた堕胎の薬を飲み、多量の血を下し死んでいく、凄まじい貧困と無知の生を描き、長塚節の「土」（明43・6）の先行ともなるようなきびしい生活を記す。そして、まさしく漱石のいう「破戒」的な作品、「小鳥の巢」

(明43・3510)を描いていく。私には、「破戒」というより田山花袋の「蒲団」(明40・9)に近い作品に思える。少しそれを追う。

「小鳥の巢」は、上十七章、下二十一章よりなる、一種の自伝的な作品である。神経衰弱で大学を休学し、十吉は「自分の都市」へ帰ってくる。家の表は醬油屋に貸し、裏の「昔の隠居所だった一棟」に祖母、父、小母が住んでいる。祖母は老いて盲目に近く昼は多く倉の中に住み、父は結核を病み血を吐いて寝ている。小母は「祖父の継母の出家家」の人、母は十吉が四歳の時死に、祖母に育てられる。父は母の死のち二十一年間、十吉のために働いてきた。十吉は万千子とのかつての恋を思う。万千子は祖母の生んだ叔母の一番上の子で、十吉の二つ年上の従姉である。山奥の資産家の娘であったが、町の生活をさせようと祖母に育てられ、十吉と兄弟のような幼き日を過ごす。二人の淡い恋、万千子は十吉の子をやどすが別れさせられる。万千子は他家に嫁ぐも離婚、二度目を医師綱村と結婚するが、そこで自殺未遂、のち、しばしば祖母のところに帰ってくる。十吉は大学に入るも気鬱を病み休学、帰ってぶらぶらしている。万千子と再会するも何もできない。無為の生の中、娼家に行き女を買い、病をうつされ腫物をつくり手術を受ける。父などの薦めもあり、島へ静養に行く。そこで小康を得るも、父の死により帰り葬儀、悪い病の残りの瘰癧の手術、葬儀のあとの挨拶まわりなどの暗い日々を過ごす。万千子が手伝いにきている、その中、万千子と再び関係を持つがともに生きる気もない。友人と相談、家売り、祖母、小母と東京に出ることにする。

ここには、「千鳥」「山彦」の抒情や詩情はない。暗い醜悪な現実、

本能の暴露、悲哀と劣情、思いやりのない自己中心の生活などなどの表現が続く。まさしく、「蒲団」の三重吉版である。

ここから二つの事が読み取れる。一つは、郷土性や地域性についての奇妙な表出である。「千鳥」や「山彦」にあった、瀬戸内や中国山地の美しさや懐かしさを含めた故郷描出はここにはない。しかし、広島を思わせる具体的な名辞が多々描かれている。これは、三重吉の他の作品には殆ど出てこない。いま一つは、抒情離れ、様々な自己告白や現実暴露の表出、当代の文学との多くの類同や呼応である。

前者から見るなら、次のようである。まずは十吉の家から見る景色について。

目の下は自分の家の裏並びが沿うてゐる旧城の濠で、その向うが測候所の土手になつてゐる。土手に何本となく続いた、葉の落ちた榎の大木の隙間から、観測室の古屋根が見える。(上―二)

「旧城の濠」とは、まだ埋められていなかった八丁堀の濠かもしれない。¹⁰⁾「測候所」は、少し不明、広島測候所は、明治十二年、水主町(現在の中区加古町)に設けられ、明治二十五年、広島市国泰寺村(現在の中区千田町)に移転している。当時、三重吉は猿楽町(現在の紙屋町)に住んでいたので距離的には少し無理に思われる。「測候所」は、のちにも「測候所の風見車」(上―十三)、「土手の向うの、測候所の窓の灯影」(下―二十一)などと出てくる。次いで、母方の伯母の家について。「伯母の家は、元の本通筋でも指折りの財産家で、大きな糸物屋をしてゐたのである。」、それが、「孝ちゃんといふのらくらの後取り」が「女狂ひと商ばい上の失敗」とで「家宅も財産も」潰し、「裏町の借家」へ入ったが、それでも「のら付いて」、¹¹⁾「よく

紙屋町の角の、市中の放蕩息子がいつも集つてゐる、あの楽器屋の椅子にかけて喋つてゐた横顔が、今でも十吉の目に残つてゐる。」（上一七）とある。「本通筋」、「紙屋町」である。幼き日、町をとびかう燕とその子育てを万千子と見た思い出の中に、「本町筋へ這入ると、そこには何十匹と群になつて、電線に並んで棲つてゐる。」と、「本町」が出てくる。同じく、「本町通」、「袋町」なども出てくる。

十吉は外へ出た序に廻り道をして、本町通の、もとの石田の家の斜すじ向むかひに小さい紙屋をしてゐる、先方の主婦さんの実家だといふ家の前を通つて見たりして、隔つた島の寂れた生活を、苛々した底黒い悲愁の中に想像しながら、伯母からの返事を待つてゐた。（下一二）

「あゝさうでしたかのい、わしや、かゝ考へ違ひをしてゐましたい。……いゝお母さまでしたがのい。わしやよく知つとりますのい。いまは見る影もない有様になつてゐますけど、あの、ふゝ袋町の紙屋が、わしの出た家うちだもんで。（下略）」（下一四）

「旧城の濠」、「測候所」、「本通筋」、「紙屋町」、「本町」、「袋町」など、固有の名辞が、殆ど説明無しに使われている。「地域性」というならこれらはまさに広島の名辞である。しかしさりとして、この作は「千鳥」や「山彦」のような「地域性」を特立しない。これらの名辞を知っている人は、広島を意識できるかもしれないが、さりとしてここから、広島という地域色は浮かび上がつてこない。「小鳥の巢」は、三重吉の自伝的要素を加えながら、しかし、「地域性」はかえつて失つていつているところがある。

二つめの、抒情離れ、当代の文学との呼応は次のようである。ここ

に二つの傾向がある。一つは現実直視、リアル化である。

この勝手元のひと間にも、蒲団や道具などがごたごたと積み込んであつた。押入れには、ぼろけた襖が一枚しか嵌つてゐない。片隅には古布ふるきの這入つた破れ行李が突つきくさしてある。何だか、生活に疲れてゐるやうに見える小母の、存在ざんざいにした髪かみの容子や、だらけた帯の手の下つたさまなどまでが、これまでの自分の家のやうにもない或落付かない空気を示してゐる。（上一二）

休学して、久しぶりに帰つた家の様子である。祖母は倉の中に、父は血を吐いて寝ている。

倉の横の小汚い物置には、腰の曲つた祖母が、危ない足元をしてがさごそやつてる。籠の取れた、古腐つた四斗樽の上に投げ重ねた炭俵を、見え悪い目をして一枚づゝ引き摺り下してゐるのである。（上一四）

父は正面の押入れの前に据ゑられた、白いペンキ塗りの鉄骨の寝台の上に、白布を被せた薄手な蒲団に柔らかく包まれて、機械刈りにした髪かみの、大分汚きたくろしく延びた頭を覗かせて、いかにも弱り衰へたやうに向う向きに横たはつてゐる。もう蠅はがある訳でもあるまいに、何のためか、白い紗の切を頭から被つてゐる。消え入るやうに、力なく寝入つてゐるらしい。蒲団に這入つた体の容積かさがひどく瘦せて見える。（上一五）

次は、静養のため島へ行く船中、そして島の様子と十吉の心。

十吉は頭の支へる船天井の中に這入つて席を取つた。どす暗いカンテラの角燈の釣るされた下に、胡麻塩頭の薄汚い百姓が、臭

い煙草を喫んでゐる。行商人らしい年増の女が一人、頭痛膏を張つた顔を押へて膝を崩して坐つてゐる。奥にも男か女か二三人寝つくばつてゐる。半分荷物を詰め込んだ狭い中に、これだけの人数が押し込まれてゐるのである。何だか豚小屋にでも這入つてゐるやうで気味が悪い。がしりがしりと暗い中で脛の方を掻き廻してゐる奴がある。(下―三)

十吉はこのやうな下卑た人間たちと一緒に暗い海を漂うて、腐つた藁屋根ばかりの並んだ、寂れた島の村へ上るのかと思ふと、人のさせる事のやうに忌々しくもある。(中略)下手の水に浮いた船茶屋で、三味線を引いて騒いでゐるのが、自分を嘲り立てゝゐるやうに小面憎い。十吉はふいと自分に病毒をうつした、あの厭な女の顔が不愉快に心に浮んで来た。(下―三)

「山彦」の宴の状況と全く異なる。「浦」の様子も次のようである。何といふ淋しい浦であらう。埠頭場と言つても、雁木の根に僅か二間ぐらゐの釣船が四五艘ばかり舫つて、びたびた揺いでゐる外には船らしい船もゐない。土手の両側には、人の背丈よりも高い枯れ薄が生え続いてゐる。蓆の腐つたのや黒い藻屑などが根元に投げ捨てゝある。まだ明け放れぬ靄が薄墨色に漂つた中に、石段の隅に食い捨てた貝殻のみが仄かに白い。(下―四)

ここには、「千鳥」のあの夢のように美しいのどかな島の景色はない。村筋の様子、「がんす」言葉なども次のようである。

十吉は低い藁屋に挿まれた狭い村筋を一町ばかり行つた。それだけで家並が尽きて、路を横切つてゐる小さい溝川のところへ出る。十吉はへなへなした渡板の上を渡るのが気味が悪いのでそこ

から引き返して来た。

「どうでがんすい、どうもせないでがんせうがの。」と、定公は煙管を銜へて、路の真ん中に立ちはだかつて待つてゐた。(下―六)

心一つで、景色は変わるのであるか、「千鳥」や「山彦」の世界を三重吉は意識して捨てていく。

二つめは、本能暴露への道行きである。帰つてみると、飼つていた「山雀」が死んでゐる。

「中にゐた山雀は？」

「死んでしまつたのですのい。言はゝ私が殺したやうなものですわの。どうやらした事でつい忘れてゐて、二日ばかり餌も水も遣らんで棄つすつとしたものですね、饑うめて死んだんです。私が浮つかりしてゐたものですね。」(上―四)

飼つていた「文鳥」を死なせた夏目漱石の「文鳥」(明41・6)を思い出させる。漱石に文鳥を飼うことを進めたのは三重吉であった。より漱石を思わせるのは、帰つてきた家の「床の間」にかかった「水の上の女の姿」の「油絵」の描出である。

画の面には黄昏れて行く水の中に、小さいお札箱のやうなものを載せた柱が、濤標のやう立つたゐて、白い着物を着た、年若い女が、その柱へかゝつてゐる。梯子のやうな段々の下に小艇こせいを着けて、糸で繫いだ赤い花の長いつながりを、艇の中から引き上げながら上つて行くところが画かれてゐる。捧げ持つ花の糸は、黒い髪の毛のかゝつた白衣の肩から揺々と下つて、二本の擢ひを引き入れた小艇の中の、同じ色の花輪の容積かさに繋がつてゐる。梯子の

中程まで上った女は、左足を一段上にかけて、将に残りの足を引き上ようとしてゐる。柱の後には夕方の水に這入り着く三角型の帆が、羽根を揚げた水鳥の群のやうに重なり合つてゐる。

(上一五)

漱石が、「草枕」の中に記した「オフエリア」の水死の様相を思い起こす。漱石の場合は、「ミレーのオフエリア」を思い出し、「水に浮んだまま、あるいは水に沈んだまま、あるひは沈んだり浮んだりしたまま、ただそのままの姿で苦なしに流れる有様は美的に相違ない。」とあり、風景は少し異なる。だが、こういった漱石との呼応から、ゆつくり、三重吉は離れていく。

「小鳥の巢」全般に流れるトーンは、「寂しさ」である。「生存」の基底を脅かす「堪へがたい寂寥」である。

このがりがりする頭を、出来れば石にでも撲つ付けて、叩き潰してしまひたいほど、自分の生存をいらいと腐らせてゐる。この堪へがたい寂寥は何であらう。人間は生命と共に寂寞を背負うて生れたものであらうか。さうしてその寂しさを亡ぼして、それを忘れて長らへるといふ事が、生きるといふ事なのであらうか。

(上一八)

十吉はそれからの脱却を「女」に求め、そしてそこに更なる寂寥を感じたりする。

何にしても、その生きたい生命が、狂ひ猛る寂寥に威されてゐるのが自分の現実の事実である。自分はこの寂寥から脱牢するために、自分の所謂理解の影を探して、徒に困憊し尽したのである。女から女へと渴き求めても、恋は遂に自分の憧憬するものを与へ

得なかつた。肉の疲憊の他には何物をも恋から得る事は出来なかつた。女が捧げ得るものは、たゞ型に押しした、単調な台詞に包んで出す、同じ一片の肉の陳腐な料理だけである。(上一八)

状況は異なるので、ただに類同、と言へば言えるのであるが、その様相は、田山花袋の「蒲団」や「田舎教師」(明42・10)の「寂しさ」や女性希求に通ずる。

家を引越歩いても面白くない、友人と語り合つても面白くない、外国小説を読み渉^あ猟^さつても満足が出来ぬ。いや、庭木の繁り、雨の点滴、花の開落などいふ自然の状態さへ、平凡なる生活をして更に平凡ならしめるやうな気がして、身を置くに処は無いほど淋しかった。道を歩いて常に見る若い美しい女、出来るならば、新しい恋を為たいと痛切に思つた。(「蒲団」)

その日の午後四時過には、清三は行田と羽生の間の田舎道を弥勒へと歩いて居た。野は日に輝いて、向うの村の若葉は美しく鮮かに光つた。けれど、心は寂しく暗かつた。かれは希望に充たされて通つた熊谷街道と、さびしい心を抱いて帰つて行く弥勒街道とを比べて見た。若い元気の好い友達が羨しかった。(「田舎教師」)

こういった寂しさは、正宗白鳥の「何処へ」(明41・154)、徳田秋声の「新世帯」(明41・1051)、⁷「足迹」(明43・7511)なども同類のものであらう。

より似通うのは、十吉の悪所通いである。

十吉はこなひだから昨夜で五晩も続けて行つたのである。あんな女がどこがよくて毎晩出かけて行くのだから、自分で自分の気が

知れない。あんな何も解らない低級な女と愚にもつかぬ事を喋つて何の足しになる。もう十時過ぎくらゐであらうか。雨戸の隙間にこんな目影の色が長けても、小母は知らん顔をして起しにも来ないのである。何だかわざと当て付けに棄つておいてゐるやうな気がして癪に障る。(上一十五)

十吉は、病気をうつされ、腫物の手術に苦しめられるのである。「田舎教師」の主人公も、中田の妓廊に通いつめる。

金の無い幾日間の生活は辛かつたが、しかし心はさびしくなかつた。朝に晩に夜にかれは其女の赤い襦袢姿と、眉の間の遠い色白の顔とを思ひ出した。その度毎にやさしい言葉やら表情やらが流るるやうに漲り渡つた。其女は初会から清三の人並すぐれた男振とやさしいおとなしい様子とに普通ならぬ情を見せたのであるが、それが一度行き二度行く中に段々と募つて来た。清三は月末の来るのを待ち兼ねた。

「田舎教師」には、病についての詳述はない。だが、作中の日記に「△腫物再発す。(中略)病後療養と腫物の為め帰校をのぼす。」の一節が記されている。悪い病かどうかは不明である。

少し牽強にすぎるが、島で、十吉は、「村の学校の代用教員」と知りあう。

「どうでもこれからは英語を知つて居らにや駄目ですぞのい？」と、木に竹を継いだやうな事を言ひ出したりした。

「あなたはどこかの学校でも出なしたのい？英語は知つちよんなさるでせうけ、えゝですぞのい。」と、いつも、このやうな単純な事を言つて暮してゐる。赤インキのあとのついた机の上に

は、反古紙で上包みをした、リーダーの独案内が載つてゐた。(下一十九)

「田舎教師」の中、主人公清三は、学校の宿直室で、英語を教へている。

学費を親から出して貰ふ友達にも負けぬやうに学問したいと思つて、心理学や倫理学などを精々と読んだが、余儀なき依頼で、高等の生徒に英語を教へて遣つたのが始まりで、段々ナショナルの一や二を持つて教わりに来るものが多くなつて、後には、かう閑を潰されてはならないと思ひながら、夜は大抵宿直室に生徒が集るやうになつた。

しかし、英語の独学をいうなら、のち、正宗白鳥の「入江のほとり」(大4・4)の小学校の代用教員をしながら、英語の独学を続ける辰男の悲しさなどが思い出される。ままならない現実の一つの表象となるものでありそうである。

十吉は女の心を領有する事なしには、とても生きてはゐられない。女の浅薄を嘲りながらも、女を所有しないと云ふ寂寥には堪へられない。もう一度恋がしたい。行き尽した後の不満といふ事は考へないで、恋を得るまでの道程を享樂するために、だれか一人の綺麗な女が欲しい。(下一十九)

こういつた女性への憧れは、「小鳥の巢」の直前に出た、武者小路実篤の「お目出たき人」(明43・2)の次のような有名な一節とも呼応する。

自分は女に餓えてゐる。

誠に自分は女に餓えてゐる。残念ながら美しい女、若い女に餓

ゑている。七年前に自分の十九歳の時恋してゐた月子さんが故郷に帰つた以後、若い美しい女と話した事すらない自分は、女に餓ゑてゐる。

おわりに

「千鳥」「山彦」を読み、その抒情に酔い、次いで「小猫」や「小鳥の巢」などを讀むと、一瞬、暗澹たる気持になる。なぜ初期の美しい世界を棄てるのか。その意味で讀むと「小鳥の巢」は抒情脱落の無残な作品に思われる。女たちへの妄執、思いやりのない自己中心や自己正當化の世界がここにある。しかし、これを当代の文界に置くと少し景色が変わってくる。「草枕」や「土」的な余裕派の残滓、「蒲団」「何処へ」などに始まる自然主義的自己暴露、武者小路実篤に代表されるような白樺派的な強い自我主張、まさに当代の文芸思潮の本流の一翼に位置するものがここにある。「千鳥」「山彦」的な抒情や浪漫の世界を切り捨て、醜惡な現実との対峙、それはまた、地域から中央への道筋でもあった。地方の牧歌的な臙化した世界との別れ、現実直視、無理想、無解決の世界の顕現である。ただ、それは、漱石の言う「命のやりとりをする様な維新の志士」の如き「烈しい精神」に応ずるものであるかは別の問題である。

「地域性」の問題に帰るなら、「千鳥」の前景に、大町桂月の「かた袖」の様な世界があった。桂月の世界は、当代のベストセラーの一つで、まさに中央のものであった。「かた袖」に地方や地域の色はない。対して、「千鳥」はまさしく瀬戸内の風土の所産であった。「か

た袖」に地域の色を加えることによって、懐かしい世界が現前化した。そして、そののち、その地域性を削除して「小鳥の巢」において中央思潮に組み替えようとした。三重吉の文学の褒貶はその振幅の内実位相の測鉛にある。

三重吉はその後、それら地域浪漫性、中央現実暴露性の両翼を削除した世界として、「桑の実」（大2・7〜10）を描いていく。そこに、三重吉の今一つの可能性と実験とがあるように思われるがすでに余白を失つた、再考を期したい。

注

(1) 岩崎清一郎『広島の文芸 知的風土と軌跡』（昭48・10 広島文化出版）

根本正義『鈴木三重吉研究』（昭53・11 明治書院）

岩崎文人『広島の文学』（平3・11 溪水社）など参照。

(2) 三重吉書簡に「わが窓の下の城の濠」の語句がある（明37・9・4 鈴木周作宛書簡）、参照。

（まきばやし こうじ、広島大学文学研究科名誉教授）